

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13959

研究課題名（和文）養育者のアタッチメント・スタイルを介入ポイントとした子育て支援アプローチの検討

研究課題名（英文）A study of parenting support approaches using the attachment style of caregivers as a point of intervention

研究代表者

岩崎 美奈子（Iwasaki, Minako）

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：40846888

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：アタッチメント・スタイル（AS）と親子の心理社会的適応の関連を検証した。（1）ADHD児とその親14例を対象とした調査では、親のASにおいて対人関係上の困難さを持つ親は抑うつ症状を強く呈し、その子どもの自尊感情は低いことが明らかとなった。（2）ASD児とその親58組を対象とした調査では、親のASの非安心さが親の抑うつ症状を強め、育児困難感を増幅させている可能性が示唆された。（3）ASD児とその親21組を対象とした調査では、62%のASD児が安心型のASを有しており、非安心型のASを有する親子は抑うつ症状が強く、アタッチメントの安心性は抑うつ症状に影響を与える可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、発達障がい児・者の増加が指摘されているが、発達障がい傾向を有する子どもの中にアタッチメントの問題を抱えた子どもが含まれていることが指摘されている。また、養育者のなかには心理教育的支援が奏功しない場合があり、背景に親子の関係性の問題が示唆されている。しかし、我が国ではこれらについての実証的な研究は少なく、親子のアタッチメントを客観的に測定した本研究は学術的意義がある。また、本研究成果は、育てにくい子を持つ養育者の子育て支援を親子の関係性から捉え、アタッチメント・スタイルに配慮した育児支援アプローチを構築するための一助として期待できる。

研究成果の概要（英文）：The relationship between attachment style (AS) and parent-child psychosocial adjustment was examined. (1) A study of 14 ADHD children and their parents found that parents with interpersonal difficulties in parental AS exhibited stronger depressive symptoms and their children had lower self-esteem. (2) A survey of 58 pairs of ASD children and their parents suggested that the non-reassurance of parental AS may intensify parental depressive symptoms and amplify parenting difficulties. (3) In a survey of 21 pairs of ASD children and their parents, 62% of ASD children had secure AS, suggesting that parents and children with insecure AS had stronger depressive symptoms and that attachment security may influence depressive symptoms.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：アタッチメント アタッチメント・スタイル 発達障がい

1. 研究開始当初の背景

現在我が国では、育児困難を抱えやすい育てにくい子を持つ養育者が専門機関を受診する際の待機期間の長期化が深刻な問題となっている¹⁾。児童虐待を受けた子どもの54%が何らかの発達障がい有ることが報告されていることから²⁾、育てにくい子を持つ養育者の支援は急務であり、支援までの待機期間の短縮は喫緊の課題と言える。このような待機期間が生じる要因としては、専門医不足や発達障がい傾向を有する子どもの増加が挙げられるが、最近では発達障がい傾向を有する子どもの中にアタッチメントの問題を抱えた子どもが含まれていることが指摘されている³⁾。しかし、子どものアタッチメントの問題を評価することは容易でないために、多くは発達障がい傾向を有するという括りでまとめられている現状がある。また、児童発達支援ガイドライン⁴⁾では、子どもへの提供すべき支援としてアタッチメントの形成が明示されているが、アタッチメントの問題は子ども単独ではなく親子の関係性の問題であるため、養育者のアタッチメント・スタイルも考慮する必要があるとあり、子どもが幼いうちはとりわけ養育者支援が重要である。児童発達支援ガイドラインで養育者へ提供すべき支援として具体的に示されているものは、養育者が適応的な育児方法を学ぶための集団介入であり、専門機関で主に実施されている。しかし、児童虐待対応件数が年々増加していることや専門機関の受診待機期間の長期化を考慮すれば、専門機関での養育者支援のみでは追いつかないことが懸念される。また、アタッチメントの問題を有する場合には親子の関係性の問題が色濃いために、養育スキルの向上のみでは養育者の育児困難感が軽減されない可能性が示唆される。そのため、育てにくい子を持つ養育者の子育て支援を親子の関係性から捉え、養育者のアタッチメント・スタイルに配慮した育児支援の支援アプローチを提案することが有効であると考えられる。これにより、地域の子育て支援拠点における育てにくい子を持つ養育者への支援の枠組みが提供でき、専門機関における受診待機期間の短縮に結びつく可能性が考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、育児困難感を抱くプロセスとして養育者のアタッチメント・スタイルに焦点を当て、育てにくい子を持つ養育者支援において、子どもの発達障害の問題と親子の関係性の問題を実証的に明らかにすることである。これにより、親子の関係性の問題に対する子育て支援アプローチを提案するための一助になると考えられる。

3. 研究の方法

【研究1】

対象：知的な遅れを伴わないADHD児(平均12.8±1.9歳)とその親14組

評価尺度：日本版自己認識尺度(The Japanese Version of the Scale for the Self-Cognition for Children; JSSC)、肯定的・否定的養育行動尺度(The Positive and Negative Parenting Scale; PNPS)、うつ病自己評価尺度(The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale; CES-D)、日本版アタッチメント・スタイル面接(Attachment Style Interview; ASI)

統計解析：JSSCの6領域、PNPSの6領域、CES-Dの各尺度間で相関係数を算出した。またASIの結果からアタッチメントの安心型(secure)の親と非安心型(insecure)の親に分けて、JSSCの6項目とPNPSの6項目、CES-Dのスコアを群間比較した。なお、相関係数はSpearmanの順位相関係数、有意確率はMann-WhitneyのU検定により算出した。統計解析にはSPSS Statistics 25を使用した。

【研究2】

対象：知的な遅れを伴わないASD児(平均11.1±1.99歳)とその親58組

評価尺度：子どもの強さと困難さアンケート(Strength and Difficulties Questionnaire; SDQ)、肯定的・否定的養育行動尺度(The Positive and Negative Parenting Scale; PNPS)、うつ病自己評価尺度(The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale; CES-D)、日本版アタッチメント・スタイル面接(Attachment Style Interview; ASI)、日本版自己認識尺度(The Japanese Version of the Scale for the Self-Cognition for Children; JSSC)、児童用抑うつ自己評価尺度(Depression Self-Rating Scale for Children; DSRs)

統計解析：JSSCの6領域とDSRS、PNPSの2領域、CES-D、SDQのTDSの各尺度間で年齢を制御変数とした偏相関係数を算出した。次に共分散構造分析(SEM)によるパス解析を用いてJSSCの6領域とDSRS、PNPSの2領域、CES-Dの尺度がTDSに及ぼす影響を検討した。

また、ASI の結果からアタッチメント・スタイルが明らかな安心型の親とそうでない親に群分けし、各尺度で群間比較した。有意確率は Mann-Whitney の U 検定により算出した。統計解析には SPSS Statistics 26 および SPSS Amos 26 を使用した。

【研究 3】

対象：知的な遅れを伴わない ASD 児（平均 10.3 ± 1.8 歳）とその親 21 組

評価尺度：日本版アタッチメント・スタイル面接（Attachment Style Interview; ASI）、うつ病自己評価尺度（The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale; CES-D）、児童用抑うつ自己評価尺度（Depression Self-Rating Scale for Children; DSRS）

統計解析：ASI の結果から母子のアタッチメント・スタイルの安心性の程度（安心/非安心）の一致率を算出し、安心/非安心、母子一致/母子不一致に群分けして抑うつの程度の差を検討した。有意確率は Mann-Whitney の U 検定により算出した。統計解析には SPSS Statistics 28 を使用した。

4. 研究成果

【研究 1】

（1）子どもの自尊感情と親の養育スタイルおよび抑うつ症状の関連

子どもの自尊感情については、養育スタイルの「意志の尊重」($r=.70, p=.005$)に有意な正の相関、「過干渉」($r=-.55, p=.044$)および「非一貫性」($r=-.71, p=.004$)に有意な負の相関が認められた。また、子どもの自己評価については、「外見」と養育スタイルの「意志の尊重」($r=.73, p=.003$)に有意な正の相関、「厳しい叱責・体罰」($r=-.60, p=.022$)に有意な負の相関が認められた。

（2）親のアタッチメント・スタイルと子どもの自尊感情、親の養育スタイルおよび抑うつ症状の関連

親のアタッチメント・スタイルは、明らかな安心型が 2 名、非安心型が 12 名であった。また、非安心型 12 名のうち、10 名が人に近づくことへの不安と回避を特徴とする「恐れ型(fearful)」に分類された。安心型と非安心型の両群間で U 検定を行なったところ、親の養育スタイルおよび子どもの自己評価との有意さは認められなかったが、親の抑うつ症状の強さ($U=22.50, p=.044$)と子どもの自尊感情($U=0.50, p=.022$)に有意差が認められた。すなわち、非安心型の親は安心型の親に比べて抑うつ症状が強く、非安心型の親の子どもは安心型の親の子どもに比べて自尊感情が低い傾向にあった。

まとめ

本研究は ADHD 児とその親を対象として、親のアタッチメント・スタイルが養育スタイルや抑うつ症状、子どもの自尊感情に与える影響について検討した。その結果、対人関係における困難さを有する非安心型の程度が高い親は抑うつ症状を強く呈し、その子どもの自尊感情は低いことが示唆された。また、親が適度な見守りの中で子どもの意思を尊重し、一貫した態度で接することは子どもの自尊感情を高める可能性が示唆された。以上より、ADHD 児の自尊感情を育むためには、親の養育スタイルのみならずアタッチメント・スタイルを考慮した親子の関係性を支援することが重要であると考えられた。加えて、安心感のある親子関係を構築するための親の対人関係における困難さに配慮した支援は、親のメンタルヘルスの維持においても有用である可能性が示唆された。

【研究 2】

（1）子どもの自己認識、養育スタイル、親子の抑うつ症状と育てにくさの関連

JSSC の 6 領域と DSRS、PNPS 2 領域、CES-D、TDS について各尺度得点の性差は認められなかったため、年齢を制御変数とした偏相関係数を算出した。母親の子どもに対する困難さ評価の指標である TDS と有意な相関が認められたのは、JSSC の「学力」($r=-.27, p=.45$)「社会性」($r=-.44, p=.001$)「自己価値」($r=-.27, p=.42$)、DSRS ($r=.50, p<.001$)、PNPS の「否定的養育」($r=-.33, p=.011$)、CES-D ($r=.54, p<.001$)であった。子どもの学力や社会性、自己価値に関する自己評価の低さ、母親の否定的な養育行動、母子の抑うつ症状の強さは母親の子どもに対する困難さ評価と有意に関連することが示された。また、子どもの否定的な自己評価は子どもの抑うつ症状の強さとの関連が認められた(表 1)。

（2）子どもの自己認識と養育スタイル、親子の抑うつ症状の強さが親の子どもに対する困難さ評価に与える影響

親の子どもに対する困難さ評価と各変数間の関係性を検証的にモデル化することを試みた。はじめに、SEM を使用して、変数間のすべてのパスを設定する仮想モデルを評価したところ、乖離度の 2 乗値は 34.67、有意確率の p 値は 0.216 であり、適合度指標の GFI は 0.962、AGFI は 0.733、CFI は 0.962、RMSEA は 0.07 であった。その後いくつかのモデルを試み、最終的に理論的整合性とモデル適合度の良好なものを得ることができた(図 1)。このモデルは「外見」から

「DSRS」へのパス係数が5%水準で有意、「CES-D」から「肯定的養育スタイル」「否定的養育スタイル」「TDS」から「DSRS」へのパス係数が0.1%水準で有意であった。乖離度の χ^2 乗値は39.079、有意確率のp値は0.124であり、適合度指標のGFIは0.901、AGFIは0.782、CFIは.957、RMSEAは0.073とあてはまりのよいモデルと考えられた。

まとめ

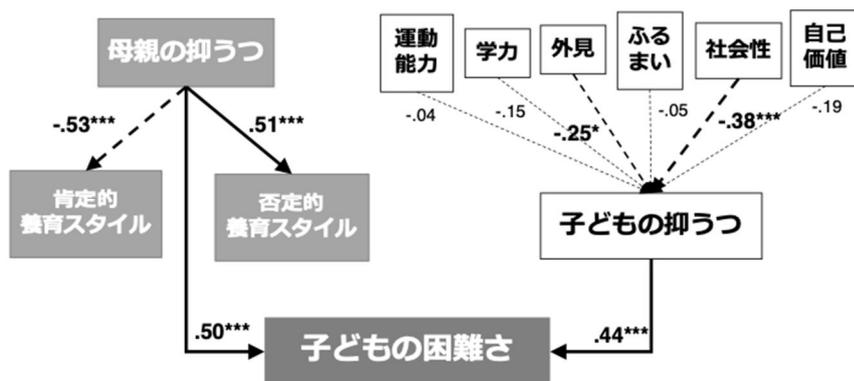
自閉スペクトラム症（ASD）児の不応行動を減らして社会化と機能的自立を促進するためには、家庭内外における親の積極的な関わりが必要となる。本研究において、親子の心理的特徴は親の子どもに対する困難さ評価にどのように影響するかについて検討した結果、子どもの外見と社会性に対する自己評価は子どもの抑うつ症状を促進し、親の子どもに対する困難さ評価に影響を与えていた。また、親の抑うつ症状は養育行動だけではなく、直接的に子どもに対する困難さ評価に影響を与えていることが明らかとなり、抑うつ症状にはアタッチメント・スタイルの不安定性の高さが影響を与えていた。以上より、ASD児の親が子どもの育てにくさを訴えた場合には、親子双方のメンタルヘルスへ直接介入するアプローチが有効であると考えられる。

表1 子どもの自己認識、親の養育スタイル、親子の抑うつ、子どもの困難さ尺度の偏相関係数と平均、標準偏差

	子どもの自己認識					子どもの抑うつ	養育スタイル		親の抑うつ	平均	(標準偏差)		
	運動能力	学力	外見	社会性	振る舞い		肯定的養育	否定的養育					
運動能力	—									9.1	(4.1)		
学力	0.21	—								12.95	(3.9)		
子どもの外見	0.36	.41**	—							15.48	(4.19)		
子どもの社会性	0.23	.26*	.38**	—						8.38	(2.75)		
子どもの振る舞い	-0.11	.40**	.44***	.29*	—					8.5	(2.15)		
子どもの自己価値	0.27	.50***	.71***	.36**	.56***	—				18.5	(4.01)		
子どもの抑うつ	-.29*	-.47***	-.62***	-.60***	-.43***	-.61***	—			10.1	(6.12)		
親の肯定的養育	-.21	0.11	0.12	0.04	0.11	0.18	-0.11	—		49.41	(9.94)		
親の否定的養育	0.26	0.24	0.16	-0.08	0.08	0.07	0	-.35**	—	53.74	(10.1)		
親の抑うつ	0.08	-0.02	0.04	-0.08	0.07	-0.11	0.16	-.53***	.50***	—	13.9	(10.64)	
子どもの困難さ	-0.17	-.27*	-0.22	-.44***	-0.21	-.27*	.50***	-0.13	.33*	.54***	—	15.81	(5.67)

note. N=58, * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

図1 親の子どもに対する困難さ評価と各変数間の関係性モデル



note. 数値は標準化推定値, $\chi^2=39.079$, $df=30$, n.s.; GFI=.901; AGFI=.782, CFI=.957; RMSEA=.073, ***p<.001, **p<.01, *p<.05.

【研究3】

(1) アタッチメント・スタイルおよび母子の一致度

親子のアタッチメント・スタイルでは、母親では明らかな安心型が3人、恐れ型と怒り-拒否型の二重のスタイルが3人、恐れ型が13人、引っ込み型が2人であり、ASD児では明らかな安心型が7人、とらわれ型が2人、恐れ型が9人、引っ込み型が3人であった。母子いずれも恐れ型が最も多いスタイルであり、実体験を教訓にして対人交流を回避する傾向にあった。特に、子どもの行動の問題に関する出来事で他者への不信感が高まっている母親は多かった。アタッチメント・スタイルを安心性の程度で分類した結果を表2に示した。親は安心型9例、非

安心型 12 例であり、43%の親が安心型であった。ASD 児は安心型 13 例、非安心型 8 例であり、62%の子どもが安心型であった。親子のアタッチメントの安心性の程度（安心/非安心）の一致率は 52%であり、一致度は低かった（ $r = .08$ ）。

（2） アタッチメント・スタイルと抑うつに関連

親の抑うつ得点は平均 15.76 点（標準偏差 13.89）、子どもの抑うつ得点は平均 10.48 点（標準偏差 6.25）であった。親のアタッチメントの安心性の程度を安心/非安心に群分けして抑うつの程度の差を検討した結果、アタッチメント・スタイルが非安心型の ASD 児は、安心型の ASD 児よりも抑うつ傾向にあった（ $U=88.50$, $p=.006$ ）。また、親も同様に、アタッチメント・スタイルが非安心型の場合には、安心型の場合よりも抑うつ傾向にあった（ $U=84.50$, $p=.028$ ）。

親子のアタッチメント・スタイルの一致/不一致による抑うつの程度を検討したところ、母子のアタッチメント・スタイルの一致と不一致による抑うつの程度には有意差は確認されなかった（母親 $U=31.00$, $p=.495$, ASD 児 $U=33.50$, $p=.603$ ）。

まとめ

安定的なアタッチメントの構築は子どもの健やかな発達に不可欠とされるが、わが国では自閉スペクトラム症児（以下、ASD 児）を対象としてアタッチメント・スタイルを検討した研究は少ない。本研究において、ASD 児とその母親のアタッチメント・スタイルと母子間のアタッチメント・スタイルの一致度及び抑うつに関連について検討した結果、62%の ASD 児が安心型のアタッチメント・スタイルを有していた。母子のアタッチメント・スタイルの一致率は 52%であった。また、非安心型のアタッチメント・スタイルを有する母子は、安心型のアタッチメント・スタイルを有する母子に比べて抑うつ得点が高かった。以上より、ASD 児は安定的なアタッチメントを構築し得ること、また、アタッチメントの安心性は抑うつ症状に影響を与える可能性が示唆された。

表 2 アタッチメント・スタイルの安心性による分類結果

		ASD児		合計	
		安心型	非安心型		
母親	安心型	6	3	9	(42.9%)
	非安心型	7	5	12	(57.1%)
合計		13	8	21	
		(61.9%)	(38.1%)		

注. 数字は人数

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2018) <https://www.mhlw.go.jp/content/000464570.pdf>.
- 2) 杉山 登志郎 (2007) 子ども虐待という第四の発達障害 学研プラス.
- 3) 友田 明美 (2018) アタッチメント（愛着）障害と脳科学 児童青年精神医学とその近接領域 59(3), 260-265.
- 4) 厚生労働省 (2017) <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/227515.pdf>.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩崎 美奈子, 井上 祐紀, 山崎 知克	4. 巻 60
2. 論文標題 保護者のアタッチメント・スタイルが注意欠如・多動症児の自尊感情に及ぼす影響について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 325-335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24782/jsppn.60.4_325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩崎美奈子, 原口幸, 山崎知克	4. 巻 31
2. 論文標題 自閉スペクトラム症の子どもに対する母親の困難さ評価に関連する母子の心理的特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どもの心とからだ	6. 最初と最後の頁 368-375
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩崎美奈子, 山崎知克
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の養育に影響する因子の検討 子どもの困難さ、母子の抑うつ、母親のアタッチメント・スタイル
3. 学会等名 第129回日本小児精神神経学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩崎美奈子, 原口幸, 山崎知克
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児とその母親のアタッチメント・スタイルが母子の抑うつに与える影響について
3. 学会等名 第41回日本小児心身医学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩崎美奈子, 山崎知克
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の養育に影響する因子の検討 子どもの困難さ、母子の抑うつ、母親のアタッチメント・スタイル
3. 学会等名 第129回日本小児精神神経学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩崎美奈子, 原口幸, 山崎知克
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児とその母親のアタッチメント・スタイルが母子の抑うつに与える影響について
3. 学会等名 第41回日本小児心身医学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩崎美奈子, 原口幸, 山崎知克
2. 発表標題 発達特性を持つ子どもとその親の心理的特徴の関連
3. 学会等名 第39回日本小児心身医学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎美奈子, 原口幸, リー・スティーブ・ケイ, 松葉百合香, 井原成男
2. 発表標題 育てにくい子どもとは何か：発達特性を持つ子どもとその親の心理的特徴の関連
3. 学会等名 第17回子ども学会議（日本子ども学会 学術集会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------